

タイトル:平成 26(2014)年度 教育セミナー(第 10 回)

日時:平成 26 年 9 月 20 日(土)~23 日(火・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「現代イランの宗教教育—ホウゼを中心に」

桜井 啓子(早稲田大学)

現代のイランには 2 種類の宗教教育がある。一つ目は、学校で行われる宗教教育で、一神教的価値観に基づく国民形成を目的としている。二つ目は、宗教学院(ペルシア語ではハウザ、アラビア語ではホウゼ)で実施される専門教育で、シーア派の宗教指導者の育成を目指している。本発表では、後者に着目し、特に 1979 年のイラン・イスラーム共和国の成立以後に実施された宗教学院改革(①制度ならびにカリキュラムの改革、②女性の宗教専門家の育成、③留学生受け入れ体制の構築と海外での宗教学院設立)について論じた。これらの改革は、宗教指導者が直接に政治に関与する「法学者の統治」(ヴェラーヤテ・ファギーフ)と呼ばれるイラン固有の政治体制を支える人材を育成するために実施されたものである。

改革の特徴をまとめると、第一の制度ならびにカリキュラムの改革は、師と弟子の個人的な繋がりを中心とする教育を改め、入学試験、単位制、学期制などに基づく教育を実施することで、正規の高等教育機関として認知されることを目指したものである。宗教指導者の社会進出を後押しするために、伝統的なイスラーム諸学と並行して、人文系の学問や外国語、IT なども学べる体制が整えられたことは注目に値する。改革に消極的だった宗教指導者も、時を経てこうした流れを受け入れる傾向にある。

第二の改革は、女性の宗教学院を設立し、女性の宗教専門家を育成できるような体制づくりを目指すものである。男性中心のイスラーム諸学の世界に女性が参入できるようになったことの意味を大きい。しかし、現在のところ女性に期待された役割は、教師、布教者、研究者などであり、宗教界で大きな力を持つムジュタヒド(イスラーム法学者)を育成できる体制にはなっていない。

第三の改革は、留学生受け入れ体制の構築と海外での宗教学院設立が目標である。イランの宗教学院は、革命直後から海外の留学生を積極的に受け入れるとともに、世界各国に海外校を設立してきた。これらの事業は、2008 年に設立されたムスタファー国際大学のもとで体系化されることになる。この大学で学ぶ留学生はイスラーム諸学と並行して、人文学、外国語、IT 教育なども履修する。現代の諸問題に対応できるような宗教専門家の育成がこの大学の狙いである。また、ペルシア語を教授言語とし、留学生にはペルシア語集中学習を義務付けている点もこの大学の特徴だ。卒業時には学士や修士などの学位も取得できるため、留学生の職業選択の幅が広がった。一方、世界各地に作られた海外校は、宗教専門家の育成に特化するのではなく、現地のニーズに合った教育を提供している。海外校の教育活動を支えているのは、主としてイランの宗教学院の卒業生たちである。

このように革命後のイランで開発された新しいタイプの宗教教育は、女性をイスラーム諸学の世界に迎えるとともに、留学生や海外校を通じて、世界各地に広められている。また、イラン発の宗教教育の広がり、国境を超えたシーア派のネットワークの拡大に寄与するとともに、その中心にあるイランの存在感

を高めてもいる。